

武田信玄の大將として

平成 30 年 10 月 1 日

横浜歴史研究会

吉田友雅

「適材適所で人材を生かす」

武田信玄は戦国時代にあってまれにみる英雄であり、大武将であった。織田信長も、信玄に一目、二目も置いていた。特に徳川家康の作戦、政治面において信玄の政策、戦略が影響を及ぼしたと言われている。

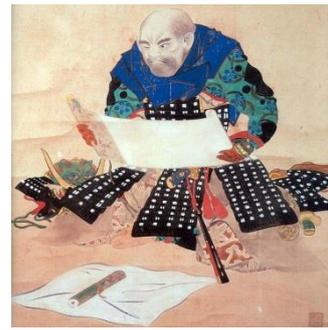
信玄は「**適材適所で人材を生かす**」名人であった。指導者には「人材」と「人材」を、どう的確に結び付け、どう最大の力を発揮させるかが最大の器量を問われる。この点において信玄は類まれな人物であった。また信玄は同じような性格の武士を好んだり、態度や行動が似たものばかり召し抱えたりすることを嫌った。ただ一つの気質だけを愛するのは、大將としてあやまりであると考えた。人間は、得てして自分と気の合う人や、使いやすいひとばかり周囲に集めがちである。優れた大將の下で、従順な部下が一つにまとまるのはいいことである。しかし3と4を加えれば7だがかければ12になる。相異なるタイプの人間でも、うまく組み合わせ、かみ合った場合には両者の力を足した以上の力を発揮するものである。

信玄の場合これを示している一人がすぐ下の弟信繁の存在である。父信虎の気ままな愛情は信玄よりも弟信繁に偏ったが、わがままには育たなかった。信繁家訓 99 条の中に未来永劫、信玄公に対し謀反の心を起こしてはならないと言っている。信繁は武将としても政治家でもまれにみる優秀な素質を持っている男であった。信玄には、絶対忠誠をつくし、武田軍の副将として立派に働いた。「甲陽軍艦」に「古典厩信繁こそは毎事相整う(すべてそつなくこなす)真の副将なり」という、山県昌景の評が載っている。



武田信繁

また「甲陽軍鑑」に家臣の一人である山本勘助という兵法の達者な武将が存在する。特に城、陣取りといった軍法に精通し、剣術は京流の達人であり、合戦の駆け引きにもよく通じていた。勘助は、はじめ駿河の今川義元のもとに仕官として参上したが、大変醜い男で、片目で指と足が不自由であったため義元は召し抱えなかった。義元には人物を見極めることができなかつたのである。信玄は勘助が三河の牛窪という田舎の身分の低い家の出身であっても、兵法を鍛錬していること、また醜い風体しているが、それでも高名であるのは只者ではないと注目し武田家に召し抱えたのである。実在した人物であるかは定かではない。



山本勘助

「甲陽軍鑑」にしろされている趣旨は、いかに信玄が人物の本質を見抜き、それぞれの個性を尊重しているかを理解できる。信玄が人材登用の「名人」であったことこそ、武田軍団の比類なき強さの要因である。また信玄は次代を担う若駒たちの育成に全力を尽くした。信玄は、部下の子息らが集まった小姓組、自分の周りには若い武士たちに武将の在り方、戦術等を自ら教えた。活躍した武将の多くは、信玄の手作りの鍛錬から生まれた。側に仕える若衆らも、貧欲に信玄の教えを吸収し、成長の糧としたことがうかがえる。結局は人間的な触れ合いなのである。



甲陽軍鑑

実は信玄も同じ経験をしている。父信虎時代の重臣の一人に萩原常陸守がいた。「智略の将」として仰がれていた。幼き信玄に接し非凡な才を見抜き、折にふれ、合戦の話の話を聞かせた。

信玄は自然に合戦のツボを学び、大いなる影響を受けた。「信玄全書末書上巻六」に「御大将の誉れ」について記されている。第一に「人の目利き」は人材の正当な評価である。第二に「国の仕置き」は国の政治である。第三に「大合戦の勝利」は戦いにおける勝利である。これをもっても信玄の指導者としての深さと強さがうかがえる。信玄は部下の意見を真摯に受けとめている。軍略や戦術を一人で決めることはせず、意見をよく聞き、協議重ねて決断をした。信玄は作戦を実行する場合、演習や訓練を繰り返した。それによって信玄の戦術は十分に発揮された。そして規律には厳しかった。

「過ちなき人物の見方」

信玄は人物の見方の大切さを教えている。「大身小身共に人をみそこのふ邪道の七つの事」として人物の本質を見誤りがちな七つの例を示している。二つの例を示したい。

第一例に「手おそ成る人を、よくおもき人に見そこのふ也」沈着な人とみそこなうものである。沈着とのろまでは大変な違いである。「十方なく物ゆふ人は、口たたきとて一日物ををいへとも友はうばい、あるいはよりやの功なる、良きことを一言ももうさす、にくければ能武士をもそしり、我に物をくれきげんを取る人をうれしがり、中よければあしき者をほめ候、十方はしを、よくさきものを見そこなふなり」といっている。なんの思慮もなく口出しする人のことを、信玄は「口たたき」と呼び、こうした「口たたき」をさばけた人と見間違っははいけない。一日中話をしていても、朋輩や寄親の役に立つことは言わない。そういう口たたきに限って、立派な武士に対しても、憎いと思えば悪口言いふらし、反対に自分に物をくれて機嫌を取る人を快く思い、自分と仲が良ければ悪い人でもほめるものだ。信玄は指摘している。いかに利発でも、雄弁ひとであっても、こうした「口たたき」のごとき人間は、決して信用してはいけない。

第二例「踏所なき人は、我しらぬ事をは作り事由、ことのほかせうこわき者なり、是を良き武士の雅のつよくして、人にまくらをいやがる豪強武勇の人にならず見そうこの者なり」と言っている。信念ない人は、自分の知りもしない話をする人は意外と強情である。人に負けるが嫌いな人物である。本当の信念を持った人は、柔軟の心を持ち、謙虚に学ぶ姿勢がある。

信玄は将の将としての「真剣」ではなかろうか、多くの将兵を抱えている。人材の登用を誤り、用兵をまちがえれば、自軍の全滅、領民の限りなき苦しみにとなる。絶対に過ちは許せない。

「智将は「五分」の勝利を上とす」

変化という現実には、どう対処していくか。どう状況の変化をとらえ、勝つことを目的にするためには価値的に動いていくか。そこに「兵法」の必要性が生まれる。「勝負」に関しての信玄の考え方は、意味深いものがある。

一つは個々の勝負に対する余裕のある心構えである。合戦における勝敗について

「甲陽軍鑑」では「十分(を)、六分七分の勝は十分の勝なり」と言っている。

すなわち十のものならば六分か七分勝てば十分である。合戦においてはこのことが大事である。そして「子細は八分の勝は、危うし、九分十分の勝(は)、味方大負けの下作也」である。

また信玄は戦いで勝利は「五分」もって上、七分で「中」とし、十分で「下」とする。また五分の勝利は励みを生み、七分は怠りを生み、十分の勝利は傲りを生むのである。信玄は六、七分の勝ちを望んだ。



「信州川中島大合戦の図」芳虎(文久3年)

上杉謙信との川中島の戦いは、天文22年(1553年)から永禄7年(1564年)までの12年間に5回にわたり行われたが、基本的な図式は、謙信は「攻めの戦い」に、信玄は「前線は戦わず、前線は死なず」と、堅固な守りを背景にし、兵を進めた。上杉謙信が信玄にかなわなかったのはこの基本的図式であったといわれている。信玄は「甲陽軍鑑」で、勝負の心得で「40歳より前は勝つように。40歳からは負けぬように」と記されている。目先の勝敗にとらわれず大局を見ることが信玄の価値観である。すなわち現在も大事であるが将来はもっと大事である。ここが賢将・凡将との分かれ道であり。この根本は工夫を重ね、着実に地力を蓄えながら攻める戦法である。例えば村上義清との戦で負けるが、この時、まわりは信玄が不機嫌ではないかと心配をよそに、能を三日間舞わせ、労をねぎった話がある。

これこそあの徳川家康にとって、偉大なライバルであり、「軍略の師」たる由縁である。家康は信玄相手に負け戦を経験する。それは元龜3年(1572年)三方ヶ原合戦である。兵力の上で劣っていた家康軍は、周到な計画と万全な態勢で臨んだ武田軍に完敗した。勝海舟は信玄の兵法を「規律あり節制ある当今の西洋流と少しも違はない」(「氷川清話」角川文庫)と言っている。

「適材適所で人材を生かす」「過ちなき人物の見方」「賢将は「五分」の勝利を上とする」。この3項目に信玄の「慈悲」が根底にある。このことが基本的考え方になっている。

「万人を生かす慈悲心」

信玄の「慈悲」とは、信玄の大將の条件として「慈悲を忘れぬことが肝要」である。武田流軍学をまとめた軍書が「甲陽軍鑑」である。信玄の振る舞い、精神を、よく伝えている。その一例が「惣別能大將は、武辺の儀は申スニ及バズ、文有て慈悲ふかし。行儀能くしてつねは柔らかなれども。いかり給う時は殿中の事はさて置ぬ、一国の内にて泣きも啼きすほど威光つよし……そう大將は行儀よければ義理深し、義理深ければ分別有、分別あれば慈悲有。慈悲深ければ、縦生付候て様子はそそけても、静かにしてそれぞれに人を見知りてつかい給へば、一人として恨申すべき様なし」。

総じて優れた総大將は、武道に優れ、学芸にも優れている。慈悲が深く、礼儀を弁え、普段は穏やかであるが、いったん起こると殿中はもちろん、国中の泣く子供も泣きやむほど威厳がある。

また優れた大將は礼儀を弁えているから、義理を重んずる。義理を重んずるから、分別がある。分別があるから慈悲深い。慈悲深いから、たとえ外見が荒っぽい性格であっても、冷静にそれぞれの家臣を見極めて召し使っているので、「人として恨みを言うものはない。」と述べている。

信玄の「慈悲のこころ」を強調したのは、情け深く公平な大將の嫡男のもとにこそ、人は集まり強兵は育つとの確信に起因する。そして、武道のみ見ならず、文武両道、さらに立派な人格が大將に備わってこそ、人心をつかみ、一糸乱れぬ行動ができる。

この基本的価値観を持った信玄を支えた武田三傑が、板垣信方、甘利虎泰、飯富虎昌である。彼ら3人は父信虎追放に中心的な役割を果たした。

板垣信方は信虎、信玄二代に仕える。また信玄のモリ役となり、信玄の時代では力を貸し、その後も重用され、甘利虎泰とともに、「両職」という重職につくのである。特に信玄の信濃攻略では勇名を馳せ、軍事面で主力的な活躍をする。志賀城の救援のために上杉憲政が送り込んだ関東管領軍を壊滅させ、佐久、諏訪の平定は板垣の力によることが大きかった。この功績から信玄は、天文12年(1543年)には板垣を諏訪郡の郡代として上原城にいれ、諏訪地方を治めた。



板垣信方

天文14年(1545年)5月、板垣はまわりの反対を押し切って小笠原長時、木曾義高

を無謀にも攻め、大敗した。信方の軽率な行動に批判が集中し、本人も蟄居の覚悟であった。信方を呼んだ信玄は最小限の損害にとどめた手腕を評価して大きく包み、まわりの者のたわ言に意を介するなどねぎらった。信方の勇猛振りを見極めて、一度の失敗にせめることはなかった。

また信玄が家督を継いだ後に乱れた生活をしていた。信方が詩作をならって自分で詩作を作り、信玄に

諫言した。これに感激し、自分の行動を反省し、板垣に誓紙を入れたという話もある。

天文 17 年(1548 年)の冬、北信濃の雄、村上義信が武田討伐に乗り出すと、破竹の勢いで進撃していた武田軍は思わぬ痛撃を受けてしまう。

村上軍を叩くためにつつじが碓館を出陣した武田軍は千曲川を挟んで上田原で村上軍と衝突した。板垣は 3500 の兵を率いて村上軍の正面に突撃し、敵を崩していく。緒戦は板垣の働きもあって武田軍は有利に進んだが、村上軍は反撃にでる。この戦いで板垣、甘利とともに討ちとられてしまう。

次に甘利虎泰である。甘利家は甲斐の名族、譜代家老衆として武田家に仕え、虎泰は信虎・信玄に 2 代を支えてきた。「両職」という重職に就いた。武田軍の中で最も恐れられていたのは甘利隊であった。敵が戦わずに逃げ出すほど強かったと伝えられている。青年時代の信玄に合戦の駆け引きを教えたのは虎泰であった。しかし、板垣信方と同様に



甘利虎泰

上田原の戦いで武田方の強引な攻めが裏目に出て、勇猛甘利隊に対し、地の利を生かした村上軍は奇襲作戦などを持ちいて翻弄し、甘利隊 700 人の将兵を失う。信玄にとっては板垣信方、甘利虎泰兩名をなくし全くのはじめての大敗北であった。信玄の傲りがあったに違いない。





飯富虎昌

飯富虎昌は信玄から北信地方の備えをゆだねられる。最初は小諸城を重要拠点として佐久地方を固めていたが、近いうちに信濃侵攻が断行されると思い、内山城も確保した。村上義清・小笠原氏に一步も引かずに戦い抜いた。天正 17 年 (1548 年) 村上義清を援助するために上杉景虎が 8 千の兵を率いて内山城を包囲した。しかし虎昌率いる 800 余りの兵に急襲され撃退する。飯富の兵の勢いはあたかも猛虎が洋に突入したがる如し猛攻振りて虎昌の名は天下に知れ渡る。

このように板垣信方、甘利虎泰、飯富虎昌 3 人が命がけで信玄に尽くすのは「慈悲を忘れぬことが肝要である」。このことではないか。

信玄は他国を攻めとったならば、その土地の領主を味方にし、人々が困窮しないように配慮した。信玄は精強な軍勢を作り、城を築かなかった。堅固の城は人であり、結束し士気を高めることであり、厳しい軍律下で、一糸乱れぬ行動で、敵を破ることに力を注ぐことである。城にこもるのではなく、外敵を国境で食い止めれば、領民が安心して生業に励むことができるというのが信玄の信念ではないか。



武田神社(躑躅ヶ崎館跡)

信玄は治山治水に努めた。甲斐の国は水害が多く、特に甲府盆地は被害が甚大で



甲州流川除「信玄堤」

あった。御勅使川と釜無川^{みだい}の二つの川を相殺させるという斬新な工法は「甲州流川除^{かわよけ}」と言われる釜無川に築造された信玄堤である。このように信玄は、日頃から領民を慈しみ・規律を正し、領民から信頼されるように努めた。信玄は「万事ちいさいことより、次

第に組み立てていって、後に大事が成るのである」という信念を持っていた。

今まで述べてきた内容から信玄は一部では冷酷無残な現実主義という評価はあるが、政治の緊密さとは、深い「知」の裏にひとしく深い「情」のはたらきが伴うもので、人情の機微もわからぬ者に民心の掌握は不可能であるといわれている。「慈悲が肝要である」このことが信玄を大武将として親しめている。現代社会にも十分に通用する内容である。

◆参考文献

- 「武田信玄(武田三代興亡説)吉田隆司 新紀元社 2005年
- 「武田信玄(伝説的英雄からの)脱却」笹本正治 中央公論社 1997年
- 「図説 武田信玄の世界」秋田書店 1988年
- 「武田二十四將」武光 誠 PHP 文庫 2006年
- 「甲陽軍鑑」(残照、指揮、名称)腰原哲郎 ニュートンプレス 2003年
- 「甲陽軍鑑」吉田豊 徳間書店 昭和48年
- 「歴史群像 武田信玄 風林火山の大戦略」学研 昭和63年
- 「英傑の日本史 風林火山編」井沢元彦 角川文庫」平成22年
- 「戦国武将の美学」北影雄幸 勉誠出版 2011年
- 「山梨県の歴史」野澤伸平 山川出版社 1990年
- 「信玄を支えた武田氏の三傑」武村副会長